

日本の最高気温観測地上位3地点(江川崎、多治見、熊谷)の猛暑日の特性比較

1170239 長谷勇磨

(Comparison of characteristics of extremely hot days at the top three

Hase Yuma

highest temperature observation sites (Ekawasaki, Tajimi, and Kumagaya) in Japan)

2013年に国内最高気温41.0℃を記録した江川崎(高知県)、2007年に国内最高気温第2位の40.9℃を記録した多治見(岐阜県)と熊谷(埼玉県)のこれら3地点の過去約40年の夏の気温を比較し、それぞれの地点の猛暑の頻度特性、さらに江川崎の国内最高気温が継続的な暑さの結果と見なされ得るかを調べた。この3地点のほか、高知県内の比較として江川崎と同様な山間部にある大栃と平野中央部の高知市も解析した。気象庁の地上観測アメダスデータを用いて、夏季7,8月の1時間値の気温が30℃以上(真夏時間)、35℃以上(猛暑時間)の年代別の回数(1978~2015年)をカウントした。観測時間間隔の依存性を調べるため、猛暑日の日最高気温と1時間値の最高気温の比較も行った。結果、1年あたりの真夏時間の頻度は、江川崎では約266回、熊谷では約274回、多治見では約333回、大栃では約203回、高知では約263回であった。また、1年あたりの猛暑時間の頻度は、江川崎では約14回、熊谷では約37回、多治見では約47回、大栃では約3回、高知では約2回であった。これらのことから、江川崎より多治見や熊谷の方が真夏時間と猛暑時間の頻度は大きく、継続的な暑さ感覚から見た暑さの順位は多治見、熊谷、江川崎であると言える。